

酒泉太守の席上酔後の作
岑参

参

酒泉の太守能劍舞

高堂置酒上夜鼓を撃ちつ

胡加一曲人の腸を断つ

坐客相看涙雨の如し

【作者】岑参（七一五〜七七〇年）盛唐の詩人、南陽（河南省）の人。一族から三人の宰相を出した名門に生まれた。三十歳の時に進士に及第したが、平凡な官吏生活を好まず、辺塞詩人としては唐代の第一人者。享年五十六歳。

【語釈】

- * 太守：郡の長官
- * 高堂：大広間
- * 置酒：酒席をしつらえ
- * 宴をもよほすこと
- * 胡茄：胡茄の曲
- * 坐客：同席している客
- * 腸を断つ：腸を切られるような悲しい思い。

【通釈】

酒泉の長官は劍舞が得意で、今宵も高殿で酒宴を催し、席上劍舞に合わせて鼓を打って楽しんでいたが、その時たまたま胡茄の悲しい音色が聞こえてくると、満座の人々は皆、望郷の思いにかられ、腸をちぎられるような悲しい思いになって、互いに顔を見合わせてぼろぼろと涙を流して泣いた。